

| | |
|-------------|---|
| Title | 天文同好會臨時總會記事 |
| Author(s) | |
| Citation | 天界 = The heavens (1923), 3(30): 195-195 |
| Issue Date | 1923-05-25 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/159875 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

二月五日(月)

英子は床を離れた。空は曇り。自分は室内で昨夜の現像やら、讀書やら。

二月六日(火)

バーナード教授重態、天文臺内の空氣重し。

バーナード氏は益々重い。今朝専門醫も遂に呼ばれた。昨夜はバーナード氏が枕元に詰めきつてゐたさうだが、今夜はダンビー氏が交代する。フロスト臺長も落ち付かぬらしく、天文臺とバーナード氏宅との間を幾度も往復して、何か考へてゐる。天文臺内の人聲も低い空は曇り、日没と共に天文臺の空氣は益々緊張した。午後八時……終に死去。天文臺の揭示板には「Advent」^{アドベント}といふ黒枠付きの揭示が出る。俄かに人の出入頻繁。殊に天文臺の事務室にはフロスト臺長とバーナード夫人とバレット氏と三人が大多忙。死去通知の電報電話の發達、葬式の諸準備など。

バンビー氏がつかりした顔付きでバーナード宅から歸つて來た。聞けばバーナード氏いよいよ臨終、息を引き取る時、枕頭にはバンビー氏のみであつたさうな。永年バーナード氏を援けたミス・カルダートは疲勞のため睡眠中であつたとのこと。最後まで、再び望遠鏡を覗くことをのみ念じながら、星に滿腔の未練を残してバーナードは去つた。いぢらしい死に方であつた。

二月七日(水)

コタンダ

今日午後二時、天文臺の中央圓堂でバーナードの葬式が営まれる。日本式に言へば「臺葬」^{トウサウ}とも言ふべき、レコード破りの學葬である。朝から式場の作り、花の飾りつけ、椅子の並べ方などで、一同多忙。揭示場には早くもウィルソン山天文臺からの長い電報が發表される。正午少し前に着く汽車で、シカゴ方面からはモートルトン、クリュークス等の諸教授、マテソンからはステビンズ教授來着さて、一時半、遺骸を入れた棺がバーナード宅を出て、北面の入口から天文臺内に運び込まれる。二時、皆着席すると共に、村の牧師ニウカム師の司式で開式。式は牧師の祈り、唱歌隊の「リ、エツツエン」兩氏及び村の一婦人」の合唱、牧師の説教があり、最後に臺長フロスト氏の弔詞演説があつた。集まつた者凡そ百名、シカゴあた

(三三)

りから馳せ参じた學者達四五名を除けば、大部分は村の人々で、何れも二十年來、バーナードと親しい交際をしてゐた人々であるからフロスト臺長の弔詞も比較的簡單で、別に履歷などは述べなかつた。しかし、それでも、バーナードの生涯を通じて、眞摯であつたこと、熱心で、又、愛情に富んだことは頗る力強く高調された。葬式といつても之れきり、この世界的巨人を葬るものとしては、形式的に悲慘なほどの式であつた。しかし、百人の會集は一人としてバーナードの親友に非ざるは無く、儀禮を抜きにして、眞に暖かきハートな以つて野邊送りなされた故人は、却つてこの「子供のやうな無邪氣なバーナード」を送る式としては、此の方法が適當であつたやうに思ふ。

式後、遺骸はミス・カルダート付き添ひ直ちにステーションに運ばれ、午後四時五分發の列車に乗せて、生れ故郷ナシヴィルに送られる。フロスト夫妻を始め、天文臺の人々村の人々、皆之れをステーションに見送る。パークハースト、リ、兩氏はナシヴィルまで送り届けて行つて、木曜日の彼地の公葬に列する筈。ダンビー氏はシカゴまで見送る。

天文同好會臨時總會記事

豫告の通り四月二十二日、京縣帝國大學理學部第四講堂に開く荒後馬氏の開會の辭に次いで、海老恒治氏は昨年十月より本年三月末迄の會計報告をなし、會則の改正幹部氏の指名選舉後、助教授理學士上田讓氏はシヤブレイ氏の宇宙觀を題し、彼の觀たる宇宙觀を述べられ、其後理學博士新城新藏氏は虚空の微塵を題して先づ獨特の新學說を平易に説明された。兩先生の講演は別に天界紙上に掲載せらるる事さなるべし。午後五時頃有益な講演を終り散會した。夜が快晴となりし爲め、中村氏、上田先生の指導にて天體觀測をなした。

幹事決定

臨時總會に於て本會の幹部は次の如く決定した。

幹事 上田讓氏 同 荒後馬氏 會計 海老恒治氏

獎勵金の贈呈

新幹事の協議に由り、長野縣上諏訪の三澤勝衛氏へ同氏の太陽觀測に對し獎勵金として金貳拾圓を贈呈した。(五月一日)